

趣 意 書

社叢は神社の森、すなわち「神々の森」である。当学会は鎮守の森を始めとする社寺林、塚の木立、ウタキなどについて、関連する諸学の垣根を取り払って調査研究を進め、地域に密着した新しい学問の創造と社叢の保存・開発をめざして設立されたものである。

かつて日本列島に住みついた人々が「神々の森」を創ったのは、厳しく、しかし美しいこの日本の自然を、ただ畏怖し、あるいは制御するだけでなく、積極的に共生しようと考えたからであった。そういう日本人の思想のシンボルとなり、かつ、行動の結節点となったものが、以後の社叢であり、そのなかには変わらぬ日本の自然が生き続けている。

そのありようは、今日の社叢についてもいえる。そこには、昔の植生、地域の動物、乱されない土壌を始め、神々の霊跡、遺跡、遺物、古建築、古植栽、古美術、古文書、史跡、名勝、天然記念物、さらにすぐれた景観、芸能、民俗行事、共同体組織、水利構造から村落配置、住民の生業や環境、文化の生成にいたるまで、有形、無形の多くの文化財が残されている。

そこで、この社叢を対象に、植物学、動物学、生態学、考古学、建築学、造園学、美学・美術史学、歴史学、民俗学、宗教学、農学、林学、水産学、法学、社会学、地理学、都市・国土計画学、土木工学、環境学、文化人類学等の諸学を結集してその解明を進めるならば、何百年、何千年にわたる日本人の変わらぬ思想や生活、環境、文化などを明らかにしうるとともに、今日、自らのアイデンティティを喪失しつつある多くの日本人に、自然を基軸とする日本文化にたいする深い自覚をうながし、大きな自信を与えることができる、また人々が社叢に関心をもつことによって、社叢の破壊をくい止め、人々の生活環境に緑を恢復することができる、さらには地球環境の悪化に悩む世界の国々にたいしても、日本文明の発信のひとつとしての環境学的指針を提示することができる、と考えられる。